

# 第2回検討会における意見への対応方針

## ご意見及び対応方針

### 【来場者の考え方について】

- 来場者は1000 万人程度ではないか。1500 万人の来場者を見込むのであれば、パークアンドライドを導入し駐車場を借り上げる必要があるため、かなりの費用がかかる。
- 来場者を1500 万人とした考え方については、事業収支（採算）の視点で考えるのか、来場してもらい啓発することを目的とするのか、その基準も示すべき。
- 1500 万人の規模で、村を表現するのは難しい。ICT等を活用して来場者を絞っても良いのではないか。

- 本博覧会では来場者に人と自然の共生や自然環境の大切さに気づかせ、意識や行動の変容に繋げるため、リアルな体験の場の提供が重要と考え、体験や自然環境の体感に適した会場空間（密度）の設定や演出の在り方を検討した結果、会場への来場は「1日当たり10万人程度」とすることが適切と判断。
- 来場者については、ピーク日の分散等の平準化を図りつつ、ICTを活用した新たな参加方式の導入や、会場外連携など多様な参加形態を展開し、参加者規模1500万人以上を目指す。
- 事業収支（採算性）の確保のため有料来場者数1000万人以上を目指す。

運営方針 展示・行催事計画 会場計画 輸送計画 コミュニケーション計画 組織・資金計画

### 【事業構造について】

- 園芸博では建設費の膨張を抑制するため、公園をどこまで整備できるかが重要。
- 淡路、浜名湖花博を参考に事業構造例をよく確認し、国が開催するレベルに合わせていくという検討が必要。
- 出展関係費用は、出展者の支援のための援助金を用意できる構造にする必要がある。

- 区画整理事業、都市公園事業等と連携・調整しながら、会場建設費の縮減を図る。
- 淡路、浜名湖花博等を参考とし、園芸博特有の支出や組織体制等に留意しつつ、A 1レベルの博覧会に適した事業構造の検討を引き続き進めていく。
- 国内外の園芸関連事業者が積極的に出展し、博覧会に関われるよう、支援のための取組を含め更なる検討を行う。

運営方針 組織・資金計画

## ご意見及び対応方針

### 【コンペティションについて】

- コンペティションの質を上げ、ブランド化することが重要。A I P Hに提案しながらやっていくのが良い。

- 本博覧会では、AIPH規則で推奨される庭園や花、鉢植え等のカテゴリに加え、テーマやサブテーマに沿った、独自企画のカテゴリにおいても実施し、花き・園芸のブランド化、日本・横浜の特色を発信することを目指す。花き・園芸や造園業など、関連業界へもご意見を伺いながら実施内容を検討していく。

展示・行催事計画

### 【Villageについて】

- 地域文化を再現した国営公園なども学ぶべき。生態系サービスの重要性、楽しさを訴えていき、その楽しさが“幸せ”につながるようにすべき。
- 村という発想は、農・地域等のコンセプトを感じさせやすい重要な言葉。未来の里山という概念を提示できれば良い。
- 本当に将来につながるようなビレッジをつくってほしい。
- ストレス緩和など花や緑の社会に資する多様な機能、江戸下町から世界に冠たる園芸文化、植物資源の保全、植物が存在する価値の大きさ等を発信してほしい。
- 体感というコンセプトが十分に表現されていない。

- Villageを通じて、日本古来の里山にみられる地縁的なコミュニティで実現されていた人や自然とのつながりを再構築し、ICTが急速に進展する現代における多様なコミュニティのあり方を提示する。
- 2050年からバックキャストして、花や緑の力をどう活かせるかという視点で、様々なコンテンツをVillage内で提供し、来場者に楽しみや驚き、感動を与え、意識変容や行動変容に繋げることを目指す。
- Village内のコンテンツは、世界各国や多様な地域の文化交流や会場隣接の農地と連携してVillage内で実現する100%サーキュラーエコノミー等を検討中。
- 参画する主体や巻き込み方等の具体的な仕組みについては、将来への継承も念頭に引き続き検討する。
- いただいたご意見を踏まえ、具体的なコンテンツについては今後検討していくが、特に主催者展示は来場者に本博覧会の趣旨を理解してもらう意義があるため、これらが発信できるよう進めていく。
- 主催者展示やVillage内コンテンツ、グリーンインフラの実装等、全体を通して体感というコンセプトが通底するよう計画を進める。

展示・行催事計画

## ご意見及び対応方針

### 【会場計画について】

- 会場の中央に大きな道があるが、この構図（規模）では村を感じることは難しい。
- 今の会場計画には、里山独特の微地形が感じられない。

- 動線については、安全性、快適性、移動負担等の軽減などの機能を持たせつつ、会場移動の主軸となる主園路とともに、Villageや展示エリアにつながる散策路などにより構成する。
- 主園路とVillage等との間の空間については、見せ方の工夫など景観に配慮した計画とする。
- 自然環境ポテンシャルを踏まえ、地形や樹林を生かした会場計画とした上で、自然的土地利用と都市的土地利用の多様な土地活用を取り入れた会場構成として、世界に先駆けるモデルを発信する。

会場計画

### 【グリーンインフラについて】

- グレーも含めて、街、インフラをどう作るか、併せてICTを前提とした新しい暮らしをどうデザインするかが重要。
- グリーンインフラの「実装」が本博覧会のキーワード。関西万博を受け継いで緑の観点から提案するのが横浜の園芸博ではないか。

- 都市の緑や農などが、防災や教育、健康と福祉など様々な公益的機能をもたらす空間として、存在効用（ハード）と利用効用（ソフト）の両面の在り方を本博覧会を通じて発信する。
- また、ICTに支えられた新たな暮らし方・働き方が、身近な自然に気づくなど、人と自然が共生する暮らし（風景）を体現する。
- 本博覧会で実装するグリーンインフラは、開催前から推進組織を設置し、開催中は成果展示の場として位置づけ、開催後はレガシーとして継承し、モデルの普及を目指していく。

会場計画

## ご意見及び対応方針

### 【輸送計画について】

- パークアンドライドについて、環境をテーマにした博覧会に車で来場させ、莫大な資金をかけることに違和感がある。
- アクセスについて、来場者交通の需要予測が必要。新交通システムの検討を先行して行い、途中駅の設置や、接続も踏まえ、将来的なプランを見通しながら計画を練ることが必要。
- 瀬谷駅だけでなく南町田駅等との連携が重要。

- 来場者を1日10万人に設定し、交通分担率を推計した。前回から輸送アクセスを見直した。
- 上瀬谷の交通特性を踏まえ、複数の鉄道路線に囲まれた立地特性を活かして、会場へのアクセスが一つの手段およびルートに集中することがないように、多様な交通手段により、南町田をはじめ、多方面に分散させる輸送計画とする。
- MaaSなどを活用した環境貢献インセンティブなど、公共交通利用の促進に向けた取組を考えるなど、ソフト対策にも取り組んでいく。

輸送計画

### 【周辺との連携について】

- 箱庭的なイベントで終了させるのではなく、山下公園や三溪園などの周辺区域と連携することが必要。
- 圃場に関する言及をすべき。例えば、近隣の優良農地や農家と連携して組合を興し、施設園芸を展開するなどの可能性も考えられるのでは。

- 会場内はもとより、周囲の農業地域や市民の森など会場外への事業の領域拡大をはじめ、都市緑化フェアやガーデンネックレス等横浜での実績を活かした取組や、山下公園・三溪園など臨海部、周辺自治体との連携などにより、博覧会で伝えたいことをより多くのチャンネルを駆使して実現する。
- 国際園芸博覧会では、大量の草花を使用することを考慮し、試験植栽圃場や植物ストックヤードなどの施設を計画する。また、会場周辺には優良な農地が広がっていることから、周辺農地との連携も、将来まちづくりの検討を踏まえ検討する。

## ご意見及び対応方針

### 【コミュニケーション計画について】

- コロナ禍で対面でのコミュニケーションが難しい中で、どのような機運醸成を行うのか。
- 来年からの取組を示すこと。マスコミによる広報よりも、取組自体が口コミで伝わっていく作風が重要。
- アートはコミュニケーションの手立てであり、エンターテインメントとアートは違う。
- アートはコミュニケーションの一種であり、コミュニケーションテクノロジーとしてのアートについて、様々なアーティストを巻き込むべき。
- 地域との関わり方について十分考慮すべき。企業以外に、NPOや農業のための移住を考えている個人など、地域の構成要員に対して声をかけていくべき。

- コロナ禍であっても、機会を捉えたマスコミュニケーション、ウェブサイトやSNS等を活用した鮮度の高い情報発信、広報ツール作成に努めるとともに、感染防止対策を講じながら可能な限りでのダイレクトコミュニケーション、他イベントとの相互連携、オンライン手法等を効果的に活用して認知度・参加意欲の向上を進める。2月末に地元小学生を対象に、花をテーマとした手形アート制作ワークショップを実施。
- フェーズごと、ターゲットごとの具体的な取組について計画案に記載。
- 工事が始まるまでの期間についても、会場を積極的に利用し、イベント空間として活用しながら、博覧会開催地としての認知度向上、機運醸成を行っていく。
- 様々な表現手法に取り組むアーティストとの効果的な連携策を具体化する。例えば、手形アートのような市民参加型（リアル、オンライン）や、開催地におけるアートイベント、園芸博に通じるテーマで話題性のあるアート制作等を通じて、認知度向上や機運醸成を図り、口コミ等での主体的参加にもつなげることが考えられる。
- 横浜らしい特色のある芸術フェスティバル等、横浜の文化イベントとの連携も検討。
- 横浜の強みである市民力を最大限に活用し、会期前から地域のコミュニティ、地元のキーパーソン、公園愛護会をはじめとした市民活動団体、企業、学校、NPO等に働きかけ、理解や協力を得るとともに、主体的な行動意欲を喚起していく。例えば、市民等によるオープンガーデンを開催し、来場者との交流、ボランティアの参加等を企画する。

コミュニケーション計画

## ご意見及び対応方針

### 【レガシーについて】

- 上瀬谷で開催する横浜市にとっての意義、またその波及効果を考え、博覧会実施後に何を獲得するのか戦略的に組み立てていく必要があるのではないか。
  - 市街化調整地域である上瀬谷が、将来の横浜あるいは日本にとってどういった意義をもつ街として提示されるのかが先にあって、博覧会を考えるとというのがあるべき姿ではないか。（リバーレガシー）
  - 博覧会開催後の街について、何をキーとして考えるか。グリーンが発想の原点ではあるが、緑、園芸、農地だけにとどまらないものを目指すべき。
  - 将来は、個々の状態がヘテロな状態になっていくことを前提としてどのような街をつかっていくのか。その街の姿を博覧会の前倒しのものとしてどう考えていくのが必要。
- 日本・横浜から「心の豊かさや幸せがあふれる持続可能なグリーンシティ」を郊外部活性化の都市モデルとして発信するため、グリーンコミュニティの醸成やグリーンインフラの実装を見据えた開催準備段階からの産学官連携や整備調整を行っていく。（グリーンインフラ推進協議会の設立等）
  - 博覧会事業は公園整備と連携して取り組み、都市近郊における「農のある暮らし」を上瀬谷から定着させる。

テーマ・サブテーマ・事業コンセプト コミュニケーション計画  
会場計画 展示・行催事計画 レガシー計画

## ご意見及び対応方針

### 【計画全体について】

- 博覧会前から人に住んでもらうという案は、実現には法的な整備も必要であり、事前準備が必要となるため、早期に具体的な実装プランを提示すべき。
- 花や緑を除くと大阪・関西万博と「共創」等の言葉が共通しており、酷似して見える。
- バックキャストの考え方や、生物を扱う点で大阪・関西万博とは異なる。
- 共有し得るコンセプトの中で、関係性やストーリーを汲んでいることが重要。
- 横浜市及び国にとって、どのような意義・コンセプトを表した場所であるのかが重要。日本の農業、地方問題等を踏まえ、この場所がどのような役割を持つべきなのかを考えなければならない。
- 将来的に人が住む場所や、農業を営むコミュニティなどを想定した目標が今から設定されなければいけない。
- 経済的視点だけでなく歴史的でグローバルな流れを計画に入れ込んでいく必要がある

- 会場区域内における居住は、基盤整備や会場建設工事を行う必要があることや、都市公園等となる将来の土地利用からも、開催前後を通じて現実的には困難であるが、地元の農業者や市民の理解と協力を得て、会場外（公園、周辺農地等）において取組の実践を図るとともに、開催期間中にはVillageや農業振興ゾーンとの連携による短期滞在等の実証実験を行うなどにより、新たなライフスタイルの体現を図っていきたい。
- 本博覧会は人を生態系の一部と捉え、自然と人の関係性に焦点を当て、過去の伝統文化を振り返り、既存の価値の再認識と未来を見据えた実証の両立を目指していく。
- 花、緑、農を通じて、均質化した社会における新たなコミュニティを創出し、シェアやつながりがもたらす幸せの幅広さを提示するため、リアルな体験・体感を重視する。
- 地方問題への対応は、グリーンインフラの整備と維持に積極的に関わるグリーンコミュニティの醸成、多様な主体の連携により創出される産業の育成を推進し、暮らしにおける人と自然の関わりを増やし、心の豊かさや幸せがあふれるグリーンシティを郊外部活性化の都市モデルとして、博覧会開催地の横浜から国内外に発信する。
- 日本の農業については、博覧会を契機として新しい品種や技術等を取り入れた持続可能なあり方を提示する。
- 会場内に複数設定するVillageにおいて、日本と海外の国の繋がりについて展示を行う場の設定を考えており、海外の国とのあらゆる交流について来場者に体験してもらう。